

# 知的障害教育における「考える力」を大切にした教育実践（1）

—中学部で考える生徒の「考える力」とは—

大竹 裕樹・司城紀代美

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第10号 別刷

2023年8月31日



# 知的障害教育における「考える力」を大切にしたい教育実践(1)<sup>†</sup> — 中学部で考える生徒の「考える力」とは —

大竹 裕樹\*・司城紀代美\*\*

宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校\*

宇都宮大学大学院教育学研究科\*\*

本研究では、知的障害特別支援学校における「考える力」について、中学部での授業実践から見えてきた生徒の「考える姿」を整理していくことを通じて検討した。中学部の生徒が授業において見せるエピソードを複数の教師で見取り、学部内研究会で意見交換しながら、生徒の多様な「考える姿」を確認した。その結果、教師が生徒の様子を丁寧に見取ることによって誰にでも「考える姿」があり、またその姿は変容していくことが分かった。そこで、中学部の生徒の「考える力」とは、「誰にでも生じる、心や体の動きの始めに見られることと終わりに見られることをつなげる力であり、次の行動に向かう力である。」と定義した。

キーワード：考える力、考える姿、知的障害特別支援学校中学部

## I はじめに

本校中学部の生徒は、知的障害の他に、自閉スペクトラム症、プラダウィリー症候群や歌舞伎症候群などの障害を併せ有する生徒が在籍しており、実態も多岐にわたっている。これまでの学校生活における生徒の「考える姿」の様子は、場面や周囲の状況に気付き、自分のしたいことを自ら行おうとするような生徒もいれば、思ったことを表現しようとする生徒、選択肢を選ぶ際には、即決するような生徒も見られ、何かを考えるという行為やその速度、考え方などを含めた「考える姿」には様々な違いが見られた。

このように、生徒によって「考える姿」とは多様であり、日常生活や学校生活において頻繁に見られるものである。さらにそれらの姿は、「考える力」によって発揮されるものであり、「考える力」と「考える姿」は相互に関連しているものと推測する。

今後、生徒に求められる力の一つに、自分の頭で「考える力」が挙げられる(細谷, 2017)。教師は、生徒の「考える力」を学校生活の中でどう育ていけるのか、学部の特徴や生徒の特性に応じた「考える力」とは何か、さらには効果的な日々の授業実践とは何かについて検討していくことが重要であろう。そのための初年度として、生徒の「考える姿」から、中学部で考える「考える力」とは何かを整理し、教師間で共通理解をもって授業実践を行っていくことが必要であると考えられる。

## II 目的

知的障害特別支援学校中学部における「考える力」とは何かについて、授業の中における生徒一人一人の「考える姿」について整理していくことを通じて検討する。

<sup>†</sup> Yuki OTAKE\* and Kiyomi SHIJO\*\*:  
Educational Practices that Value the Ability  
to Think in Education for Intellectual  
Disabilities (1) : What is the "thinking ability"  
of students who think in junior high school  
Keywords: ability to think, How children  
"think", Intellectually Disabled Special  
Needs School Middle School

\* Special Needs Education School Attached  
to the Cooperative Faculty of Education,  
Utsunomiya University

\*\* Graduate School of Education, Utsunomiya  
University  
(連絡先: shijo@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

### Ⅲ 方法

#### 1 中学部における生徒の「考える力」の仮説

研究協力者の指導・助言を基に、教師間で意見交換し、学部内で検討を重ね、生徒の「考える力」について仮説を立てた。

#### 2 「考える力」に焦点を当てた授業づくりと授業実践

中学部で立てた仮説を基に、生徒の「考える力」に焦点を当てた授業の学習指導案作成と授業づくりを行った。授業実践では、一人一授業の取り組みとして、6月～10月の間に研究授業を行った。

#### 3 生徒の「考える姿」のエピソード記述と学部内研究会の実施

授業実践の中で見られた生徒の「考える姿」についてエピソードを記述し、教師間で意見交換を行った。意見交換は、Google社が提供するオンラインホワイトボードサービスであるGoogle Jamboard（以下、ジャムボード）を使用して行った。研究協力者からの指導・助言を基に、授業の中のどの場面で生徒の「考える姿」が見られたかについての記述と、記入者から詳細についての説明を求めた。また、出された意見を同じ場面や同じ姿ごとに分類し、キーワードを挙げながらカテゴリズして整理した。なお、整理していく過程は、全てジャムボードを使用し、パソコンの画面上で行った。

#### 4 中学部における生徒の「考える力」の再検討

学部内研究会で出された「考える姿」やキーワードを基に、中学部で考える生徒の「考える力」について再検討を行った。

### Ⅳ 結果と考察

#### 1 中学部における生徒の「考える力」の仮説と再検討

表1には、中学部の研究会等において検討した、学部の「考える力」について示した。6月は、研究協力者の指導・助言を基に、学部の教師間で意見交換し、学部研究会等で検討を重ねることで仮説を立てた。そして、その後の研究授業や公開研究会の実践後に行った研究会を通して、「考える力」について再検討をした。

6月の時点では、中学部では、考えるという行為は生徒本人の中で起こっていることであるので、生徒の内面の見取りが大切であるとの意見が出された。また、生徒の内面の変化や考える間を適切に待つことが大切であるという研究協力者からの指導・助言を基に、授業中のある1場面を録画し、教師間

で生徒の動きや内面に着目して協議を行った。その中で、自分の気づきや他者からの働き掛けをきっかけとして自分が正しいと思ったことをしようという意図があるのではないかと推測した。その結果、「考える力」とは、場面ごとの状況に応じて、自己の気づきや他者からの働き掛けをきっかけとして、順序や正誤、自分の思い等を判断し、次につなげる力なのではないかと仮説を立てた。

表1 中学部で考える生徒の「考える力」の仮説と定義

検討した時期	「考える力」とは
6月 (研究協力者の指導・助言後)	・場面ごとの状況に応じて、自己の気づきや他者からの働き掛けをきっかけとして、順序や正誤、自分の思い等を判断し、次につなげる力。
9月 (授業実践と部内研究会後)	・誰にでも生じる、心や体の動きの始めに見られることと終わりに見られることをつなげる力であり、次の行動に向かう力である。
12月 (授業実践と公開研究会実施後)	・誰にでも生じる、心や体の動きの始めに見られることと終わりに見られることをつなげる力であり、次の行動に向かう力である。

その仮説を基に、6回の研究授業を行った。授業研究会では、どの生徒にも「考える姿」の報告があったことから、「考える姿」は誰にでも生じていたことが分かった。また、思いや疑問をもったり、試行錯誤などしたりしている姿の報告も多くあがった。これは、中学部の生徒が、これまでの学びの積み重ねを基にして、学習に対して自ら見通しをもつことができたり、知りたいという欲求等がでてきたりしたためであると考えた。

さらに、授業における生徒の内面の変化や考える間に着目した「考える姿」について見取ることで、気づきから始まり解決に終わる、欲求から始まり表現に終わるなどのように生徒の「考える姿」は変化していくことが分かった。そのため、6月での定義を再検討し、中学部の生徒の「考える力」とは、誰にでも生じる、心や体の動きの始めに見られることと終わりに見られることをつなげる力であり、次の行動に向かう力であると考えた。

12月には、11月に行った公開研究会を踏まえてこの定義について学部研究会で再検討を行った。公開研究会では、参加者と共に授業における生徒の「考える姿」について意見交換を行った。ここで見られた意見も、気づきから始まり表現に終わるなど、定義に即したものが見られた。このことから、9月に再検討した定義が妥当であると考えた。

## 2 「考える力」に焦点を当てた授業づくりと授業実践

表2には、中学部の教師が行った六つの授業実践について示した。

表2 授業実践一覧

教科・指導の形態名	単元・題材名
生活単元学習	校内宿泊学習の振り返りをしよう
生活単元学習	他校の友達と伝え合おう
生活単元学習	作ったものを使って、確かめてみよう
生活単元学習	電気を通す物と通さない物を探そう
総合的な学習の時間	喜多方市内を調べよう
生活単元学習	舟のレースをしよう ～磁石の性質を確かめよう～

授業づくりと授業実践は、6月～8月の期間と10月に、一人一授業の研究授業として行った。研究授業は、①授業のための学習指導案の作成、②教材・教具づくり、③学習環境の設定、④授業実践という流れで行った。

授業づくりでは、思いや予想を可視化できる教材の活用や自他の考えを比較できる教材の活用、そして、生徒の思いや考えを教師が整理したり、代弁したりする手立てで工夫を行った。

## 3 生徒の「考える姿」のエピソード記述と学部内研究会の実施

それぞれの授業中に見られた生徒の「考える姿」について学部内研究協議を行った。図1～6は、学部内研究会において教師から出された、生徒の「考える姿」とキーワードについてジャムボードに記入されたものを示した。

「校内宿泊学習の振り返りをしよう(図1)」では、場面ごとに振り返りを行った。できたかどうか、楽しかったかどうかを数値化して表した。自分の意思や記憶から選択する姿、経験したことを思い出して表現する姿などが見られた。

2022/07/11 校内宿泊学習をしよう

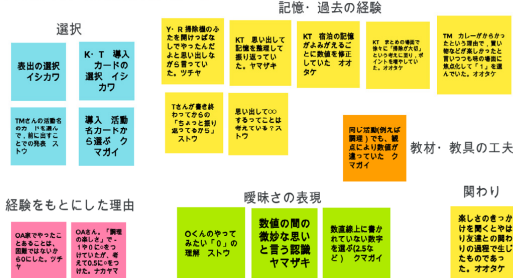


図1 「校内宿泊学習の振り返りをしよう」における「考える姿」

「他校の友達と伝え合おう(図2)」では、交流校へ贈るプレゼントについて学級で話し合っている姿、自分なりに表現している姿、友達の意見と比較している姿、根拠を基に選択をしている姿などが見られた。

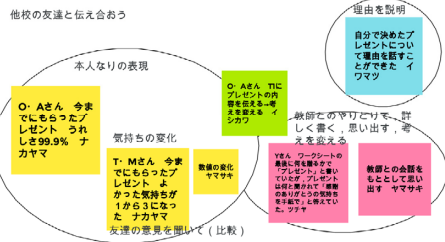


図2 「他校の友達と伝え合おう」における「考える姿」

「作ったものを使って、確かめてみよう(図3)」では、文房具などを用いてアーチェリーを制作し、数種類のゴムを使用して確かめる学習を行った。気付いて修正する姿、思ったことを表現する姿、悩んでいることについて一旦決断する姿、記憶していることについて発表する準備をしている姿などが見られた。

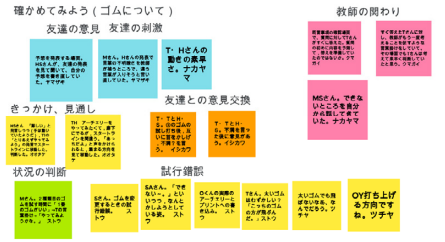


図3 「作ったものを使って、確かめてみよう」における「考える姿」

「電気を通す物と通さない物を探そう(図4)」では、身近な物を対象に通電を確かめるかどうかを確かめる学習を行った。驚きから疑問が生じる姿、既知のものから生じた疑問について検討する姿、試行錯誤した結果から生じた意見を発表する姿などが見られた。

2022/7/6 確かめてみよう(電気について)

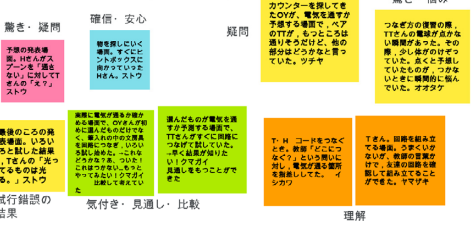


図4 「電気を通す物と通さない物を探そう」における「考える姿」

「喜多方市内を調べよう(図5)」では、修学旅行先の目的地について調べる学習を行った。選択肢の検討から始まり決断する姿、歩きたいコースの検討から始まり決定、教師の言葉掛けから気づき、修正する姿などが見られた。

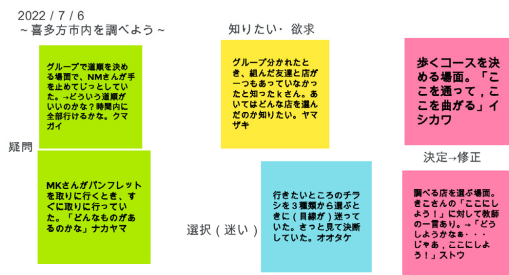


図5 「喜多方市内を調べよう」における「考える姿」

「舟のレースをしよう(図6)」では、小さな舟を制作し、机上でレースを行う過程で磁石の性質を確かめる学習を行った。試行錯誤から解決する姿、自分も持っている意思を表現する姿、経験を踏まえていくつか比較し、発見する姿などが見られた。

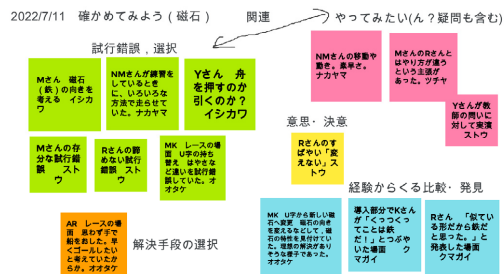


図6 「舟のレースをしよう」における「考える姿」

学部内研究会は、各教師から出された生徒のエピソード記述をまとめる形で行った。検討を重ねるごとに各教師が生徒の「考える姿」を丁寧に見取ることができた。その結果、先述したように、生徒それぞれが授業の中で、思いや疑問をもったり、試行錯誤などしたりしている姿の報告が多くあがった。教師が授業における生徒の内面の変化や考える間に着目し、生徒のエピソードについて見取ることを行った結果、生徒の「考える姿」は、気づきから始まり解決に終わる、欲求から始まり表現に終わるなどのように一つの姿だけではないと考えた。

このことから、中学部における生徒の「考える力」とは、「誰にでも生じる、心や体の動きの始めに見られることと終わりに見られることをつなげる力であ

り、次の行動に向かう力である。」と定義できると考える。

## V まとめと今後の課題

中学部では、授業実践を通じて、生徒の「考える姿」がどこに見られたかについて検討を重ねてきた。その具体的な生徒の姿から、学部で考える生徒の「考える力」について、表1のように整理した。

先述したように、六つの授業実践とその授業研究会での検討を通して、どの生徒にも「考える姿」があることが明らかとなった。また、生徒はその思いや気づき、疑問などをきっかけとして次の行動につながり、考えたりするなど、「考える姿」は次につながるかたちで変化することも分かった。

今後の課題として、教師は生徒の「考える姿」を忠実に読み取れるようにすることがあげられる。生徒の内面では様々に考えた結果として出た発言であっても、教師がその考えを読み取りにくかったために授業とは関係がない発言だと判断してしまった場面があった。今回の研究の成果として、日常生活から十分に意識して生徒の考えの傾向を見取ることによって生徒の「考える姿」を読み取りやすくなると予想される。そのため、今後も日常生活から「考える姿」に着目していく取り組みが重要であると考えられる。また、そのような場面では生徒と十分にやり取りをすることで、なぜその考えに至ったのかを共有することができる。そのため、どのようなやり取りが有効であるか、今後も検証していきたいと考える。

## 付記

本稿は、宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校における令和四年度校内研究の中学部研究(メンバー:石川雄大、大竹裕樹、熊谷妃、須藤里江、土屋峻人、中山道子、山崎有子、司城紀代美\*)として共同で取り組まれたものの一部を筆者らの責任の下に発表するものである。(氏名の並び順は五十音順、※は研究協力者)

## 文献

細谷功(2017)『考える練習帳』,ダイヤモンド社。

2023年3月31日 受理



Educational Practices that Value the Ability to Think  
in Education for Intellectual Disabilities (1) :  
What is the “thinking ability” of students who think  
in junior high school

Yuki OTAKE and Kiyomi SHIJO